

人々のみを中心としてきた既存研究に対して、無関心な人や批判的な人、参加しなかった人にも焦点を当てた点で本章は画期的であり、物や語りをとおしての経験の共有は、新たな聖者信仰研究を開く視点となるであろう。

第7章では、フキーによる治療儀礼をもとに、聖者信仰と民衆イスラームについての再検討がなされている。治療儀礼をとおして明らかとなったのは、「聖者信仰的なもの」が、一般の人々の主体的解釈の上に成り立っているという点である。また、評者が特に重要であると考えるのは、聖者信仰にみられる特徴が、批判的な人や一見無関係な人をも取り込み、人々の生活の中にどれほど深く浸透し、それが人々の経験や認識として現れているかという点である。日常生活にもみられる聖者信仰的なものに着目すると、もはやそれは廟を中心とした従来の聖者信仰研究とは大きく異なる内容となることが予想され、「聖者信仰」の定義や分析概念そのものの再検討が必要となるであろう。

終章では、これまでの議論を総括し、著者の主張が述べられている。本書では、民衆的なイスラームにかかわる既存の研究と理論を批判的に検討し、聖者信仰的なものを日常生活との連続性のうちにとらえ直した。治療儀礼の事例で示されたように、日常生活との連続性の中に神の恩寵や祈願、奇蹟をとらえ直すならば、聖者信仰を特徴づけるものとしてこれらの概念を特別視する発想から距離を置く必要があると著者はいう(p.307)。治療儀礼を皮切りに、日常生活の中での聖者信仰的なものについての著者の事例研究や分析が、今後も期待される。

既存の民衆イスラーム論の中では、イスラーム知識人と民衆の間には越えられない知的隔たりが前提とされていた。しかしながら、現在では地域差があるとはいえ、識字率も高まり、インターネットなどの情報インフラや交通網の発達等により、「民衆」であっても「知識人」になる機会は増えている。聖者と民衆を連続性のあるものとしてとらえる著者の視点は、このような現在の状況を考察する上でも有用な分析概念であると評者は考える。

これまで受動的な存在として分析されてきた民衆を主体として、既存の理論や研究を検討し、新たな定義付けをおこなった本書は、民衆イスラームや聖者信仰研究に新たな道を開いたといえる。ただその定義は新しく画期的であるがゆえにまだ精緻に分析される余地がある。本書はその先導役となり、今後の同分野の研究の発展に十分に資するであろう。

(藤井 千晶 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)  
附属ケナン・リファイー・スーフイズム研究センター特任准教授)

タヌーヒー 『イスラム帝国夜話』 上下巻 (森本公誠訳) 岩波書店 2016-2017年 上巻 541頁、下巻 601頁

本書は、10世紀後半、ブワイフ朝期のイラク地方に生きた法官タヌーヒーによる逸話集『座談の粋として記憶すべき数々の物語』(*al-Nishwār al-Muḥāḍara wa al-Akḥbār al-Mutadhākira*). 書名の訳は本書の訳者による。以下『座談の粋』)の原語であるアラビア語から日本語への翻訳である<sup>1)</sup>。

まずは訳者の紹介から始めたい。訳者の森本公誠氏は、『初期イスラム時代におけるエジプト税制史の研究』でパピルス文書を用いた先駆的研究を行ったことで名高く、その英訳版は現在まで初期イスラム時代の制度史研究、パピルス文書研究において必ず参照すべき古典的研究として、海外の学界においても高く評価されてきた[森本 1975; Morimoto 1981]。また、氏はイブン・ハルドゥーン『歴史序説』の翻訳者でもある[イブン・ハルドゥーン 1979-1987]。現在日本でもイブン・ハルドゥーン研究が盛んに行われているが、その基礎を築いた一人が森本氏であったことは間違いない。そして、氏が既に『座談の粋』の訳業を終えられていることを評者も数年来仄聞しており、翻訳の刊行を待ちわびていたところであった。

さて、本書の原著者とその著作について、簡単に紹介しておこう。著者であるタヌーヒー Abū ‘Alī

1) なお本訳書に関しては、既に橋爪烈氏による書評がある[橋爪 2018]。あわせて参照されたい。また、本訳書の原典書名については、『座談の糧』とされることが多いが、訳者の選択した書名を用いることとする。Nishwārの解釈については[Tillier 2007: 3, n. 12]および[橋爪 2018: 30-31]を参照。

al-Muḥassin b. ‘Alī al-Tanūkhī は、938年に、法官であった父アリーの子としてイラク南部のバスラに生まれた。ウラマーとしての教育を受け、長じた後に公証人を務めていたが、960年にはバグダードに上り、イラク中部の一地域における法官職を得た。その職務はバグダードにいながらにして務められるものであったため、彼はバグダードに留まり、時の宰相の側近となって、文人が集う座談の場に参加することができたという。その後、政情の変化によって、一時期バグダードを離れて別地域の法官職に就いた後、970年に再びバグダードへと戻ったのだが、このときにありし日の座談のにぎわいが既にあることを嘆き、自らの記憶に残る逸話と当時の出来事などを『座談の粋』にまとめたのである。以降、再び政情の波に翻弄されながら様々な地域の法官職を務めたが、983年にはブワイフ朝のアドッド・アッダウラの不興を買って罷免されることになり、994年に没するまで著述活動に専念していたと考えられる。タヌーヒーがまとめた書物として、『座談の粋』の他にも、逸話集である『苦難のあとの救い (al-Faraj ba‘da al-Shidda)』『寛大な行為の賜物 (al-Mustajād min Fa‘alāt al-Ajwād)』があり、これらは著作全体の写本が伝存している。その他、箴言集である『珠玉の箴言 (‘Unwān al-Hikma)』を著したとされる。

今回翻訳がなされた『座談の粋』は、11巻本として執筆された大部の逸話集であったが、本来の形で残っているのはそのうち1巻、2巻、3巻、8巻のみであり、本訳書の底本とされたアラビア語テキストには、それに加えて別の書物に引用されて残っている逸話(と校訂者が考えたもの)が、4巻から7巻までとして収録されている。本書において翻訳されているのは、実際に現存する1-3巻および8巻のすべての逸話と、底本の4-7巻に収録されたものの中から訳者が適宜選択した逸話となっている。

本書に採録されている逸話は極めて多様であり、ブワイフ朝、そしてその基盤となるアッバース朝社会の様々な側面を垣間見ることができる。著者は序文において、逸話中に取りあげられる人々として、王やカリフ、宰相から始まって、文人、学者、スーフィー行者、農夫、泥棒、歌姫、占星家、医者、水夫、工人、商人などの職業や、けちんば、高慢ちき、高潔な人々、世捨て人といった人間の性質などを含めて、200以上の類型を列挙している。それらの様々な人々が社会の中で交錯してゆく様が、座談に集まった人々の関心を惹くようにして語られているのである。

本書では、他の多くの逸話集とは異なり、逸話がテーマ別に集められているわけではない。その中でそれぞれの逸話を結ぶ構造として時折現れるのが、「昔」と「今」の対比である。タヌーヒーの逸話においては、しばしば先に昔の逸話が語られ、その後に現在の状況を語り、多くの場合現在の状況を嘆く、という構図が見られる。上述したように、このような懐旧の念そのものが、本書の執筆の動機となっているのである。とはいえ、タヌーヒーの採録した逸話の多くは、彼の同時代か直近の時代に属するものである。イブン・クタイバの『話の泉 (‘Uyūn al-Akhbār)』やイブン・アブド・ラッビヒの『類稀なる首飾り (al-‘Iqd al-Farīd)』のような先行する逸話集が、その記事の多くを著者自身より前の時代に求めているのは好対照をなしており、同時代のアッバース朝社会の息吹を直接的に伝えてくれるものとなっている<sup>2)</sup>。

さらに、本書の史料価値として評者が挙げたいのは、アッバース朝期の経済活動に関する記述の豊富さである。例えば第1巻146話では、文法家として高名であったザッジャージュについての逸話の中で、彼が雇われてガラスをカットする仕事に就いていた時に、その日当が「銀一ディルハムと三分の一か二分の一以下」であったことが語られている。アッバース朝期イラクでの商業などに用いられた民間の文書史料はほとんど残っていないため、このような市井の人々の収入に関する証言は極めて貴重である。

また、第1巻66話においては、バグダード近郊に、どれだけのレタス畑があり、そこからどれだけのレタスが収穫されたか、そして最終的にバグダードの人々が一シーズンに50,000ディーナール相当のレタスを消費していたということが語られる箇所さえある。この記述は、昔日のバグダードの繁栄ぶりを懐かしむ逸話の中に現れるのであるが、当時の人々の生活とそれを支える経済についても詳細に知ることができるのである。

もちろん、本書から知ることができるのは経済的な状況だけではない。彼自身が法官であったことから、そこに寄せられる訴えや法廷を舞台とした逸話もあり、当時のイラク社会の実相を見ることができる。ま

2) ただし、タヌーヒーの逸話集に関してはタヌーヒー自身の編集についても史料批判的研究([Ashtiany 1991; Hamori 1998; Tillier 2007])が行われてきている (cf. [岡崎 2009])。著作の全体が残る『苦難の後の救い』を中心に扱うことが多いようだが、『座談の粋』に関する包括的な史料的研究も待たれる所である。

た、タヌーヒーが参加していた座談の場が宰相のもとに仕えている人々が集う場所であったことから、当時の行政の実態を伝える逸話が極めて多く、行政文書アーカイブが伝存しないアッバース朝の行政についても一級の史料となっている。

本書に関して一点だけ惜しまれるのは、索引が備えられていないことである。本書には、おそらく翻訳の底本とした校訂版に付された注釈をベースとしつつ、それを大幅に補った訳註がつけられている。アッバース朝からブワイフ朝期にかけての様々な人物が登場し、訳註として彼らについての簡にして要をえた情報がまとめられているほか、事項についても、税務に関する細かい用語から生活の中で用いられた物品に至るまで、当時の社会を理解するために必要な言葉が網羅されている。本書は、もし索引が付されていれば、アッバース朝社会の研究を志す学生にとって、非常に強力な「工具書」ともなったと思われる。

もちろん、本訳書の価値は、それでいささかも揺るぐことはない。アッバース朝期の逸話を大量に収録した本書が出版されたことによって、中世イスラーム社会で人々がどのように生きていたのかを、日本の読者も容易に知ることができるようになった。気が早い話ではあるが、版元である岩波書店によって本書が文庫化され、より多くの人々が手に取り、座談を聞くように気軽にタヌーヒーの語りを堪能することができるようになることを願ってやまない。

#### <参考文献>

- イブン＝ハルドゥーン 1979-1987『歴史序説』（森本公誠訳・解説）全三巻、岩波書店（文庫版として『歴史序説』全四巻、岩波文庫・青（33）-481、2001 がある）。
- 岡崎桂二 2009 「『マカーマート』における医療のトポス——蘇生術、産婆術、預言者の医術」『四天王寺大学紀要』47, pp. 217-244.
- 橋爪烈 2018 「森本公誠（翻訳）タヌーヒー『イスラム帝国夜話』上下巻」『イスラム世界』90, pp. 29-37.
- 森本公誠 1975 『初期イスラム時代エジプト税制史の研究』岩波書店。
- Ashtiany, J. 1991. “al-Tanūkhī’s *al-Faraj ba’d al-Shidda* as a Literary Source,” in Alan Jones(ed.), *Arabicus Felix Luminosus Britannicus: Essays in Honour of A. F. L. Beeston on his Eightieth Birthday*, Reading: Ithaca Press, pp. 108-122.
- Hamori, A. 1998. “Tinkering with the Text: Two Variously Related Stories in the *Faraj Ba’d al-Shidda*,” in S. Leder (ed.), *Story-telling in the Framework of Non-fictional Arabic Literature*, Wiesbaden: Harrassowitz, pp. 61-78.
- Morimoto, K. 1981. *The Fiscal Administration of Egypt in the Early Islamic Period*. Dohosha.
- Tillier, M. 2007. “L’exemplarité chez al-Tanūhī : les cadis dans le Nišwār al-muḥāḍara,” *Arabica* 54, pp. 1-24.

（亀谷 学 弘前大学人文社会科学部講師）

---

末近浩太 『イスラーム主義——もう一つの近代を構想する』（岩波新書）岩波書店 2018 年 530 頁

「あるべき秩序の回復」を目指す政治潮流は、近年世界的に強い存在感をもつようになっている。それはアメリカのトランプ政権に象徴的に示されたように、遠い異国の話ではなく、「われわれ」の社会においても生起し、時に「排外主義」や特定の「人種至上主義」といった自己／他者の境界の再設定と結びつきながら展開している。「あるべき秩序」とは何なのか、それを「回復」させるためにどのような手段をとるのか。あるいは、何が「あるべき秩序の回復」へと進ませ、進むことが何をもたらすのか。こうした問題について検討せざるを得ない状況が日常に広がっている。

この一世紀を見渡せば、この「あるべき秩序の回復」という政治潮流がもっとも顕在的に、持続的に展開してきたのがイスラーム主義に他ならないだろう。そのイスラーム主義について、最新の研究動向を踏まえながら一般読者にもわかりやすく解説しているのが本書である。